

[論文]

映像教材によるカウンセリング学習の効果に関する検討

— カウンセリングの失敗場面を用いて —

中 坪 太久郎^{*}

要 旨

本研究では、「うまくいっていない面接」のカウンセリング場面を収録した映像教材を作成し、初学者のカウンセリング学習に対する効果を検討することを目的とした。研究参加者に対して、ビデオ視聴の前後において、自由記述形式での質問項目への回答を求め分析を行った。その結果、視聴前群と視聴後群では、記述文字数において差がみられ、記述内容の形式およびテキストマイニングの結果においても、視聴前群では、「カウンセラーが〇〇を行う」といった形式や、「癒す」「助ける」といった単語が多く見られたのに対して、視聴後群においては、「カウンセラーとクライアントが〇〇を行う」といった形式や、「態度」「合わせる」といった単語が多くみられた。このような結果は、学習者のクライアント役への同一化から生じた可能性があることから、今後のカウンセラー教育でも映像教材による学習やクライアント体験の重視といった点が重要であることが示唆された。

Key words：公認心理師，心理面接，カウンセラー教育，カウンセリング学習，映像教材

I 問題と目的

1. カウンセラーとしてのトレーニングにある難しさ

2018年度から心理職の国家資格として公認心理師資格の制度が開始され、心理学教育においてもその対応が求められることとなった。これまでは主に大学院において実施されていたカウンセラー、セラピスト（これ以降は便宜的に、カウンセラー、カウンセリングという用語に統一する）としての基礎的トレーニングを、全てではないにしても学部教育の中でも取り組んでいくことが求められている。そもそも、対人援助の心理専門職の教育は、これまでそれなりに長い歴史がある大学院教育の中でもまだまだ手探りの部分もあり、標準化され世界中どこでも通用するような一貫した教育体制が整備されているとは言い難い。教える側の難しさがあるということは、教えられる側である学生にとっても、さまざまな困難があるということである。下山（2010）は、このような心理専門職を目指す初学者の迷いや困難について、「日本で臨床心理学を学ぶ場合、港

※ 淑徳大学総合福祉学部准教授

を出てすぐに誰もが迷いやすい難所がある」という例えでその難しさを表現している。

このような心理専門職のトレーニングにおける難しさの要因としては、従来から言われているような学派や理論の多様性に由来するものがある一方で、カウンセリングが原則として「密室」の中で行われていることも大きな要因のひとつと考えられる。これは、カウンセリング行為には守秘義務があり、非日常的場面を提供するものであるからこそであるが、ワンウェイミラーやライブスーパービジョンなど、特別な場合を除けば、他のカウンセラーが行っている面接の様子を他者は知り得ないのである。もちろん、ケースカンファレンスやスーパービジョンにおいて詳細な逐語を見る機会もあるが、それ自体が資料の作成者の主観が含まれており、微妙な間や息づかいなどについては、参加者の想像によって補うしかない。例えば大工の職人であれば、親方の工具の使い方や段取りの組み方を弟子が見様見真似で学ぶことができるだろう。営業職であれば、先輩社員と一緒に得意先に出向き、商品のプレゼンテーションの仕方を学ぶことができる。その意味では、経験のあるカウンセラーの面接に陪席することは、大工や営業職のように見て学ぶことが可能なトレーニングのひとつであるが、陪席に入るようになるまでもそれなりの時間と経験が必要になるため、学部教育で多くの学生が参加するのは難しい。

そのような密室の中での知見を補う方法の一つとして、映像教材による学習は今後も重要な手段となると考えられる。カウンセラーとしてのトレーニングを受ける者が必ずと言っていいほど一度は見る映像教材として、「グロリアと三人のセラピスト」(日本・精神技術研究所)がある。一人のクライアントに対して、異なる理論的背景を持つ三人のセラピストが面接を行うわけであるが、どのような意図の基に対話が展開されたのか、セラピスト側からの解説があることから、初学者のみならず経験のあるカウンセラーのスキル向上にも有用な教材と言える。同様の観点から作成された映像教材は、日本人カウンセラーによるものも含めて多数存在するが、これらに共通するのは、経験のあるカウンセラーによる「適切なカウンセリング」場面が収録されていることである。いわゆるマスターセラピストと呼ばれるような、その学派の創始者であったり、長くその理論によって仕事をしているセラピストであったり、その様子は、カウンセリングを学ぶ者が見様見真似で実践していくのにも大きな貢献をするものと思われる。

一方で、カウンセリングを学ぶ者の中にも多様性がある訳だが、特に初学者が学ぶ場合に、マスターセラピストの映像教材は、ややハードルが高い。実際に自分がカウンセリングを行っている者であれば、セラピストの解説は自分の体験との比較から理解しやすいものであるが、そもそも密室内の様子を体験したことのない者にとっては、想像の中で考えていくしかない。おそらく良いことが、適切に、行われているのだろうというなんとなくの想像はできるが、元々の自分のやり方を持っていない者にとっては、見本にはなりにくいのである。もちろん、カウンセラーのトレーニングの順序として、まずは基礎的な心理学の学び、次に臨床心理学の理論的学び、ロールプレイによるクライアント・カウンセラー体験、経験者の面接への陪席、といった流れは重要である。それに加えて、この学びの流れの中に、密室内の実用的イメージが先行することによっ

て、理論やテキストによる学びにもより具体性が出てくるのではないだろうか。しかし、さきほど述べたように、その密室内のイメージが、あまりに現在の自分とかけ離れていては、具体的なイメージ素材として利用することが難しい。カウンセリングを学び始めたばかりの初学者が、いきなりマスターセラピストの映像を見ても、そこには余りに大きな乖離がある。

2. 初学者の具体的イメージに寄与するための映像教材

このような問題意識から、筆者は初学者が自分の等身大のイメージができるようなカウンセリングの映像教材について開発することを検討した。これまでに用いられてきた映像教材が、経験のあるカウンセラーの、適切にマネジメントされた面接映像であったことを踏まえて、全く逆の「うまくいっていない面接」の映像教材を作成し、初学者の学習に用いることとした。失敗事例を題材とした心理面接の解説については、書籍としてはいくつか出版されているが、このようなこれまでとは全く逆の映像教材を初学者向けとして作成した理由は以下の二つである。ひとつは、うまくいっていない面接を見ることによって、うまくいくためには何が足りないのか、学習者が考える機会を提供できると考えたからである。例えば自分がこの面接内のクライアントであったなら、このような言い方や態度をされたら困る、このようなやり方であれば安心して話ができそうだ、といった素朴な感想が、カウンセラーとして最低限身につけておくべきものは何か、ということを学ぶ上で重要な役割を果たすと考えた。もう一点は、ひとつめの理由とも関連するが、「良い」カウンセラーのイメージを固定しないためである。特に初学者の学びにおいては、ひとつの正解があることは安心材料になるものだが、それによって多様なクライアントや場面に開かれた学びが制限されてしまうことは避けたいと考えた。このように、カウンセラーとして働く上で必ず身につけておくべきスキルへの気づきが生じる期待と、さらに発展的に学ぶための余地を残すという理由から、反面教師としての「うまくいっていないカウンセリング場面」の映像教材を作成することとした。

3. 本研究の目的

本研究の目的は、上記の観点から作成された映像教材の効果について検討を行うことである。初学者の学びのひとつとして映像教材を用いて、映像を見る前と後では、カウンセリングに対するイメージにどのような差があるのか、自由記述の回答を分析する。得られた知見を用いて、今後初学者への教育に有用となる手段についても考察を行うこととする。

II 方 法

1. 研究参加者

対象は筆者の心理学関連の講義を受講した学生である。映像を見る前の参加者は142名（平均

年齢20.32歳：男性44名，女性98名：学部学生132名，大学院生10名），映像を見た後の参加者が149名（平均年齢20.35歳：男性46名，女性103名：学部学生137名，大学院生12名）であった。なお，一人で複数の回答をした者が数名いたが，それについては別のデータとして扱い，また，前後のデータを個人で紐付けていないことから，回答は前後で独立した別の回答として扱った。

2. 映像教材

今回作成したのは「カウンセリング学習ビデオ」という名称で，約45分間の映像である。カウンセリングルーム内での，ロールプレイによるカウンセラーとクライアントの面接を8場面録画し，編集した。セラピスト役は6人の人物が演じており，2名は2場面で別のセラピストとして登場する。なお，クライアント役は全ての場面で同一人物（男性）であり，主訴も「抑うつ状態」であるが，カウンセラーとのやりとりについては，ベースとなる設定を基に適宜演じてもらった。8場面のカウンセラーの概要を表1に示す。各カウンセラー場面の時間は約5分で，8場面がタイトルを挟んで連続して映像として流された。

表1 登場するカウンセラーの一覧

カウンセラー の 名前	性別	カウンセラーの特徴
カブセ	女性	クライアントの話が終わる前に相づちを打つようなせっかちなカウンセラー
ツカサ	男性	握手を求めたり，「っすねー」のような語尾の，チャラチャラしたカウンセラー
ナシダ	女性	声小さくクライアントの顔を見ず，自信のないカウンセラー
オサダ	男性	自分の話ばかりするカウンセラー
キマリ	女性	クライアントの話したことに全て断定口調で結論を出すカウンセラー
ソワダ	女性	常に髪をいじったりキョロキョロしたり落ち着きのないカウンセラー
ジジツ	女性	クライアントの話の中でも事実確認のことしか取り上げないカウンセラー
ムシノ	男性	クライアントの返答には応じず，ひたすら統一感のない質問ばかりするカウンセラー

3. データの収集

データは筆者が担当する講義，演習等の中の一部の時間を用いて収集された。研究参加者を対象に，研究の趣旨について説明を行い，同意が得られた者のみが参加した。質問項目は，『『心理療法』や『カウンセリング』とは，どのようなもので，何をするものだと理解していますか』のひとつのみであり，Webのアンケートページを用いて，自由記述による回答を求めた。全員が回答を終えた後，カウンセリング学習ビデオを視聴した。視聴後，再びはじめと同様の質問への回答を求めた。なお，質問項目への回答が終わるまで，筆者はビデオ内容に関する発言をすべて控えた。

4. 分析方法

得られた自由記述データに対して、①記述文字数の比較、②記述内容形式の種類による分類比較、③テキストマイニングによる比較、の3つの分析を、ビデオ視聴前群とビデオ視聴後群に対して行った。なお、統計分析についてはIBM SPSS Statistics 25を、テキストマイニングについては、ユーザーローカルテキストマイニングツール (<https://textmining.userlocal.jp/>) を用いた。

Ⅲ 結 果

結果1. 記述文字数の比較

はじめに、質問項目である「心理療法やカウンセリングとはどのようなものか」に対して、どれくらいの量のイメージを持って表現できるか比較するために、ビデオ視聴前群と視聴後群の記入文字数について比較を行った。その結果、ビデオ視聴前群の研究参加者が記入した文字数の平均は28.50文字であり、ビデオ視聴後群の文字数の平均は47.09文字であった(図1)。それぞれの文字数を得点とみなしてt検定で比較した結果、両群の差が有意($t = -5.964, df = 289, p < .01$)であり、ビデオ視聴後群の方がカウンセリングについて多くの記述を行っていた。

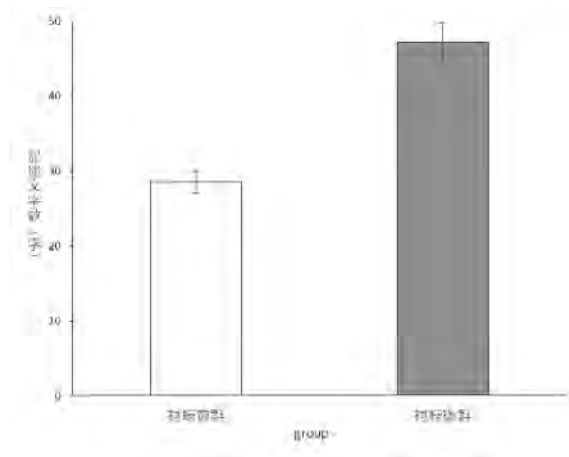


図1 ビデオ視聴前後の記述文字数の比較 (エラーバーは標準誤差を示す)

結果2. 記述内容の形式による分類比較

次に、自由記述の内容についての傾向を比較するために、内容形式分類による比較を行った。はじめに、記入された自由記述の回答を何度も繰り返し読んだところ、記述の内容として「存在の記述」に二種類があり、その記述の仕方が重要であることが見いだされた。代表的な記載例を表2に示す。ひとつは、「話を聞いてくれる」「人の悩みを解消するもの」のように、記述文の前に「カウンセラーが」という付記が可能な記述内容である(カウンセラーのみの視点から何かを

するような記述)。もうひとつは、「クライアントの主訴にカウンセラーが寄り添って共に悩みを解決するための手段」「自分がこれからどうなりたいかを、カウンセラーやセラピストと一緒に考え、解決に向かっていくもの」のように、カウンセラーとクライアントの両方が存在しているような記述（両者を客観的に見ているような記述で、多くは「一緒に」といった表現がされる）である。全ての記述文をこの基準に沿って分類したところ、ビデオ視聴前群のカウンセラー文が76、両者文が63、どちらにも分類できない記述が3であったのに対して、ビデオ視聴後群のカウンセラー文が41、両者文が105、どちらにも分類できない記述が3であった。表3にカウンセラー文と両者文のクロス集計表を示す。なお、どちらにも分類できないデータについては省略した。表3について χ^2 検定を行ったところ、有意差が認められた（ $\chi^2(1) = 20.81, p < .001$ ）。そのため、ビデオ視聴前群と視聴後群ではカウンセラー文と両者文を記述することに差がある可能性が示唆された。

表2 記述の形式の違いの代表例

カウンセラー文	両者文
心を楽にするもの	自分がこれからどうなりたいかを、カウンセラーやセラピストと一緒に考え、解決に向かっていくもの
話を聞いてくれる	クライアントの話を真剣な態度で聞き、そのクライアントに合わせた方針を共に立てていく
心の悩みを相談する、または心の病を治療する場。学校や職場などに行けない人を助ける場	クライアントに本人が抱える問題の再確認をしたり、クライアントが抱える問題について詳しく聞き、クライアントの問題解決を共に目指すものである
話を聞きクライアントの精神状態を良い方向に持って行くこと	クライアントの抱える問題の解決を目指し、その方法を共に考え、困難に立ち向かうクライアントを支えるものだと思う
心的な障害を治療しようとするもので、相談や検査などをするもの	クライアントの悩みを聞いて、一緒に解決に導くもの

表3 ビデオ視聴前後と記述文の形式によるクロス集計表

視聴時期の群		文章の主体の表現		
		カウンセラー文	両者文	合計
ビデオ視聴前群	度数	76	63	139
	%	54.7	42.3	100
	期待度数	57.1	81.9	139
	調整済み残差	4.6	-4.6	
ビデオ視聴後群	度数	41	105	146
	%	28.0	72.0	100
	期待度数	59.9	86.1	146
	調整済み残差	-4.6	4.6	
	度数	117	168	285
	%	41.1	58.9	100

結果3. テキストマイニングによる比較

最後に、テキストマイニングによる比較の結果を示す。なお、内容が同じで記述が違うもの（クライアントとクライアント、聴くと聞くなど）については、比較のために揃えたうえで分析を行った。図2および図3は、ビデオ視聴前群と視聴後群それぞれの出現頻度による単語分類の結果である。なお、図3は左から、ビデオ視聴前群の回答のみにだけ出現した単語、ビデオ視聴前群によく出る単語、両群に出る単語、ビデオ視聴後群によく出る単語、ビデオ視聴後群にだけ出る単語の順に並んでいる。視聴前群には、「癒す」や「助ける」など、「カウンセラーからクライアントへの処遇」を想像させる単語が多く並んでいるのに対して、ビデオ視聴後群には、「合わせる」や「態度」など、「カウンセラーの協働姿勢やカウンセリングの前提条件」のような単語が多く並んだ。次に、図4は、単語の出現頻度について、名詞、動詞、形容詞ごとの比率を示したものである。この結果についても、「治療」「手助け」「行う」「導く」「引き出す」といった単語がビデオ視聴前群に多くみられたのに対して、「一緒に」「態度」「姿勢」「寄り添う」「向かう」といった単語についてはビデオ視聴後群に多くみられた。

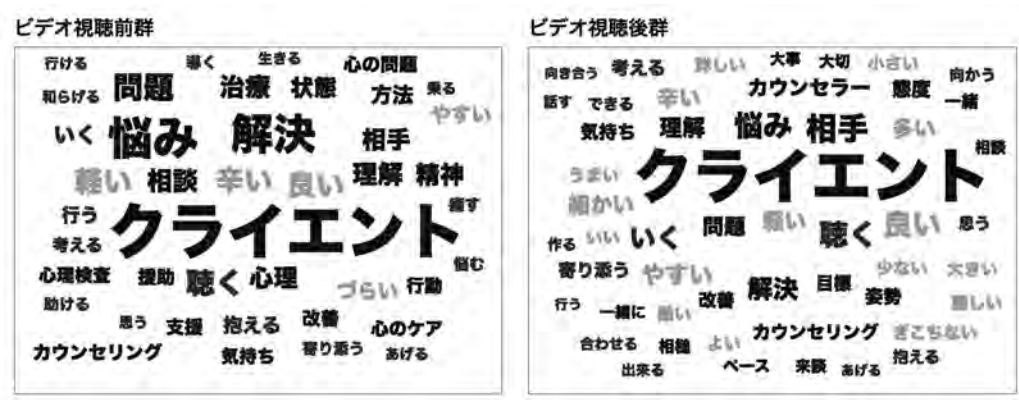


図2 ビデオ視聴前群と視聴後群の単語の出現頻度（全体）

ビデオ視聴前群にだけ出現	ビデオ視聴前群によく出る	両方によく出る	ビデオ視聴後群によく出る	ビデオ視聴後群にだけ出現
癒す 何かしら 生活 対処 行動 助ける 心理検査 心の病気 緩和 痛み 要因 検査 来訪 助言 心的 がい 乗る 障る 行ける 与える 安定 面接 意志 職場 価値観 新た ストレス 時点 支え 自分自身	悩み 解決 問題 抱える 相談 行う 治療 心理 状態 方法 精神 援助 支援 悩む 導く 和らげる 手助け 生きる アセスメント 心の問題 目指す 心のケア 回復 アプローチ 行く 見つける 傾聴 軽減 困難 引き出す	クライアント 聴く いく 相手 理解 考える 寄り添う カウンセラー 気持ち 改善 カウンセリング 一緒に 話す あげる 良い 来談 持つ 不安 患者 出す 辛い サポート 因る 軽い 心理療法 共感 探す やすい 問題解決 場所	思う できる 合わせる ベース 一緒に 質問 適切 見る 受ける 自身	態度 姿勢 目標 向かう 相違 大事 出来る 作る よりそう 大切 雰囲気 言葉 目線 タイミング 距離 相づち 環境 進める 変わる 向き合う 話せる 希望 親身 根本 長期 適当 信頼関係 空間 適度 お手伝い

図3 ビデオ視聴前群と視聴後群の単語の出現頻度（分類）

■ 名詞			■ 動詞			■ 形容詞		
ビデオ視聴前群	単語	ビデオ視聴後群	ビデオ視聴前群	単語	ビデオ視聴後群	ビデオ視聴前群	単語	ビデオ視聴後群
50	クライアント	50	50	聴く	50	50	良い	50
66	悩み	34	38	いく	62	63	辛い	37
69	解決	31	68	抱える	32	63	軽い	37
38	相手	62	81	行う	19	41	やすい	59
66	問題	34	43	考える	57	0	多い	100
83	治療	17	38	寄り添う	62	0	細かい	100
79	相談	21	34	思う	66	100	づらい	0
53	理解	47	33	できる	67	0	小さい	100
90	精神	10	71	悩む	29	0	大きい	100
84	心理	16	76	導く	24	0	脆い	100
83	状態	17	16	合わせる	84	0	ごちさない	100
78	方法	22	60	あげる	40	0	楽しい	100
36	カウンセラー	64	72	和らげる	28	0	少ない	100
44	気持ち	56	78	生きる	22	0	うまい	100
53	カウンセリング	47	39	話す	61	0	いい	100
71	援助	29	58	持つ	42	0	怪しい	100
71	支援	29	100	垂す	0	0	よい	100
52	改善	48	63	出す	37	0	正しい	100
93	心の問題	7	68	目指す	32	---	---	---
92	心のケア	8	68	行く	32	---	---	---
42	一緒	58	100	助ける	0	---	---	---
73	手助け	27	76	引き出す	24	---	---	---
84	回復	16	86	用いる	14	---	---	---
19	ペース	81	86	治す	14	---	---	---
0	態度	100	68	見つける	32	---	---	---
63	不安	37	41	困る	59	---	---	---
68	アセスメント	32	0	向かう	100	---	---	---
44	来談	56	46	探す	54	---	---	---
0	姿勢	100	29	見る	71	---	---	---
35	一緒に	65	29	受ける	71	---	---	---

図4 品詞ごとのビデオ視聴前群と視聴後群の出現頻度の比較

IV 考 察

1. ビデオ視聴によるカウンセリングイメージの賦活

ビデオ視聴前群と視聴後群の回答記入文字数の比較の結果、視聴後群では約1.6倍の記載がみられた。今回の対象者はほぼ全員が密室内に入ることがない者であり、記載内容についてはこれまで学習してきたことを基に書かれたものと推測される。そこには、テキストレベルでの学習だけでなく、その他のカウンセリング映像による学習やテレビでの疑似場面など、映像による学習も含まれるかもしれない。映像を見た直後には書けることが増えたというのはある意味では当たり前前の結果とも言えるが、文字ではないものを見ることが文字での豊かな表現を可能にするという意味では、カウンセリングの映像教材が学びの道具として有効に機能することを期待させるものである。カウンセラーとして働く上では、カウンセリングの中での体験をカンファレンス資料や事例研究の論文として文字化して表現することが常に求められる。今回の映像素材である「うまくいっていない面接場面」に限らず、映像を用いてカウンセリングの学習を進めることには、やはり大きな効果が見込まれると言えるだろう。

2. 「与える」ものから「共に」へのイメージの変化

まず、カウンセリング行為が「与える」ものであるかどうかという議論は難しいが、ビデオ視聴前群の参加者の多くがそのような表現での記述をしていたことは重要である。対人援助職を志望する者の欲求のひとつとして「他者に影響を与えたい」(Corey et al, 1998)という思考は大きなものである。学生の多くは、カウンセリングとは他者に何かを与えるものであり、カウンセラーとはそのような欲求を満たせる職業だと意識の無意識的に認知しているのかもしれない。実際にはカウンセリングの効果があるということは、カウンセリング場面でクライアントが改善や健康や気づきを得るものであり、それは何かを得た結果とも言えるだろう。しかし、カウンセリングを学び従事する者においては、それらがカウンセラーから一方的に与えられるものであるという認識はあまりしないと思われる。そのため、カウンセリングを「導く」ものや「引き出す」ものとして記述することにはやや抵抗がある。筆者としても「そういう表現をしてはならない」と言われた記憶はなく、カウンセリングについて学んでいくうちに自然と身についた考え方であると思われる。

今回の記述の形式の分類結果においては、ビデオ視聴前群の「カウンセラーが〇〇を施す」というイメージから、ビデオ視聴後群では「カウンセラーとクライアントが〇〇を（共に）行う」というイメージへとその差がみられた。また、テキストマイニングによる単語レベルでの記述文の分析においても、「援助」「癒す」「治す」といったカウンセラーが何かを施す単語ではビデオ視聴前群が優勢であったのに対して、「態度」「一緒に」「合わせる」といった単語ではビデオ視聴後群の方が優勢であった。今回の映像素材が、決してカウンセリングのハウツー的なものではなく、あくまでも「うまくいっていないカウンセリング場面」の映像であることが、今回の結果を解釈する際には重要である。カウンセリングは、クライアントと協働して取り組むものであること、カウンセラーの態度がケースの進展に重要な意味を持つこと、といった点は、ロジャース派だけでなく、今やどのような理論的背景を基に仕事をするにしても基本的な理解といえる。ビデオを視聴することによって、「引き出す」や「導く」、「治療する」といった表現をすることを控え、協働的な志向が記述されるようになったことには、どのようなメカニズムが働いたのだろうか。

最も大きな理由は、参加者がクライアント側の立場になってビデオを視聴したからではないだろうか。おそらくクライアントの立場になれば、このようなカウンセラーに話をしたくない、このような反応をされたらうまく話ができない、といった気持ちが生じると思われる。クライアント側からすれば、「引き出され」たり、「導かれる」よりも、カウンセラーに適切な「態度」を取ってもらって自発的に話したいし、共に問題に「向き合い」たいと思うのは、多くの場合自然である。このような作用は、マスターセラピストの「うまくいったカウンセリング場面」からでは生じない可能性がある。なぜなら、マスターセラピストの映像教材は、「カウンセラーの見本」として存在するからである。もちろん、経験を積んだカウンセラーであれば、マスターセラピスト

のケースであっても、疑問に思ったり改善点が浮かんだりするかもしれないが、おそらく初学者はそういう見方はしない。あくまでもカウンセラー側の立場に立つのが前提なのである。今回は映像視聴前に特に映像に関する教示をしていないため、これがうまくいっていない面接場面の映像であるという点については、教材を見始めてから気付くものである。映像を見ているうちに、ややおかしなカウンセラーの存在に気づき、視聴者もおかしな影響を被る者として自分を認識したのではないだろうか。うまくいった面接の映像視聴においてもクライアント側に立つことは可能であるが、うまくいっていない面接の方がその立場に立ちやすいと思われる。

3. 今後のカウンセラー教育への示唆

この結果をふまえて、今後のカウンセラー教育について考えてみたい。まず、映像教材を学習に用いることは非常に有効であると思われる。このことは臨床心理学が実践の知であることをふまえれば当然のことである。具体的なカウンセリングイメージがない中で、カウンセリングの技法やカウンセラーの態度を学び、自分が実践している様子を想像したとしても、それは妄想にしかならない。しかし、いくら実践の具体的なイメージが学びの前提に必要なだとしても、密室内で行われるカウンセリング場面を見ることはできないというジレンマに陥る。その難しさを補う方法のひとつとして、ロールプレイではあっても、映像教材は有用である。確かにロールプレイと現実の臨床場面では異なる部分もある。しかし、臨床実践とは多様なクライアントが存在するものであり、ひとつの実際場面が全ての臨床場面を表す訳ではない。ロールプレイか現実場面かという違いの問題よりも、現に人と人が問題を話し合う際に生じる間合いや雰囲気を感じるものが、学習者の初期の学びには必要だろう。ロールプレイであっても、人と人が問題について話し合っていれば、間合いや息づかいを含んだやりとりが、現実として起こらざるを得ないのである。本研究の結果からも、ビデオ視聴前群に比べると、ビデオ視聴後群ではより豊かなカウンセリングイメージに関する言語表記がされることが示された。豊かに表現できるようになったということは、それだけ具体的イメージが膨らんだと理解して問題ないだろう。

また、本研究の結果からは、言語表記の量の増加だけでなく、カウンセリングそのものに対するイメージの変化が生じたことも示された。この点をふまえて、今後のカウンセラー教育に有用なものとして、「クライアント体験を活かす」という点を挙げたい。現在でも、多くの大学や大学院において、授業や実習の中でカウンセリング体験を行っていると思われる。そこでは学生同士がカウンセラー役とクライアント役になり、架空の問題やクライアント役がやや困っていることについて傾聴の実践をやってみる、といった取り組みがされていると推測される。このような取り組みの中ではカウンセラー役の態度やスキルについての言及がされる訳だが、クライアントの体験についてもカウンセラー役と同程度に焦点を当てるのが初学者の学びには有効に働くと思われる。今回の研究結果においては、ビデオ視聴前群と視聴後群に差がみられたことから、「うまくいっていない面接」の映像を見ることで、カウンセリングに対するイメージに変化が生じる

と解釈することができるが、視聴前には「カウンセラーが〇〇をする」という表現だったのに対して、視聴後には「カウンセラーとクライアントが〇〇をする」という表現に変化していた。カウンセリングとはなにかと聞かれてカウンセラー側の行為をイメージするのは自然なことであるが、ここにクライアントがやや困っている映像教材が入ることによって、クライアント役への自身の重ね合わせが起こり、カウンセラーのスキルや態度への言及が生じたものと思われる。つまり、自分がクライアントもしくはそれに近い体験をすることが、カウンセリングそのものに対する意識を高めることになることができる。下山(2014)は、Corey & Corey (1998)の指摘を参考に、心理援助専門職者が抱く自己の欲求をいくつか挙げており、そのなかには「恩返しをしたい」「自分が救われたい」といった欲求が含まれている。これはクライアントもしくは元クライアント的な欲求であり、カウンセラーという職業を選ぶ者のある種の傾向を見て取ることができる。自分が救われたい欲求について下山は、「自らの人生の苦難に取り組むことを契機として他者の苦悩と、その問題解決支援に関心を持つことは自然であり、それは心理援助専門職として仕事をしていく原動力になる。自ら苦悩の経験があるからこそ、他者の苦悩を理解し、癒すことが可能となるとも言える」と述べている。カウンセリングに関する学びの中でもクライアント体験に適切に焦点を当てることによって、カウンセラーに求められる態度やスキルへの気づきが生じる可能性をふまえれば、そこにカウンセラーを目指す初学者の(元)クライアント性を肯定的に利用するための道筋を示すことができるかもしれない。

4. おわりに

今回の研究においては、記述データについての視聴前後の結びつきが行われなかった。本来であれば、個々人がどのように記述を変化させたかといった観点からの分析も重要であり、この点については今後の課題である。加えて、映像教材のどの場面でどのような気づきや感想が得られたかといった、詳細な分析も必要であろう。これによって、より利用度の高い映像教材を作成することが可能になる。

また、今回作成された映像教材について、別の機会において感想を求めたところ、学部学生においては、この一連の面接場面はよくない面接の映像であり、ジジツ(客観的事実だけを聞くカウンセラー)の場面だけが成功場面(おそらく答え合わせの答えのような認識)であるとの感想が多く出された。一方で、大学院生においては、この面接場面も問題であり、もう少しクライアントが訴える感情や思いにも焦点を当てるべきだ、との意見が出された。このことは、映像教材だけでは気づきにくいカウンセラーのスキルや態度があることを示していると思われる。場合によっては、もう少し長い面接場面の映像であれば、視聴者のクライアントへの一体化から、客観的事実だけを聞かれ続けることの苦しさが体験されたかもしれないが、5分程度の面接場面ではそこまでの気づきには至らないだろう。このことから、映像教材によって学習者の中に沸き起こる理解や気づきと、テキストや講義を通じた学びをうまく統合させながら学んでいくことが重要

であり、そのような初学者向けの学習プログラムまで発展させることが望まれる。

付記

本研究は平成29年度淑徳大学学術奨励研究費の助成を受けて実施された。

【文献】

- Corey, M.S., & Corey, G. (1998). Becoming a helper, 3rd ed. Brooks/cole. (=2004, 下山晴彦監訳『心理援助の専門職になるために』金剛出版.)
- 下山晴彦 (2010) 『これからの臨床心理学』 東京大学出版会.
- 下山晴彦 (2014) 『臨床心理学を学ぶ2 実践の基本』 東京大学出版会.